

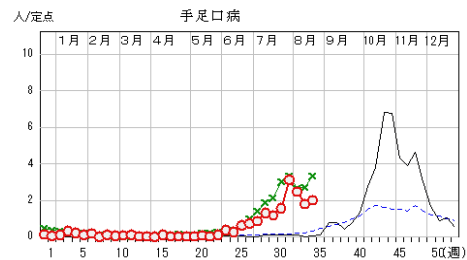
# 長崎県感染症発生動向調査速報（週報）

2022年第34週 2022年8月22日（月）～ 2022年8月28日（日） 2022年9月1日作成

## ☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

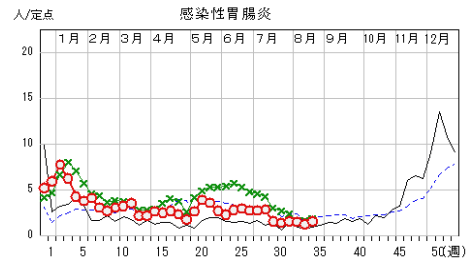
### （1）手足口病

第34週の報告数は88人で、前週より9人多く、定点当たりの報告数は2.00であった。  
年齢別では、1歳（44人）、2歳（22人）、3歳（12人）の順に多かった。  
定点当たり報告数の多い保健所は、県北保健所（7.67）、県央保健所（5.17）、佐世保市保健所（2.00）であった。



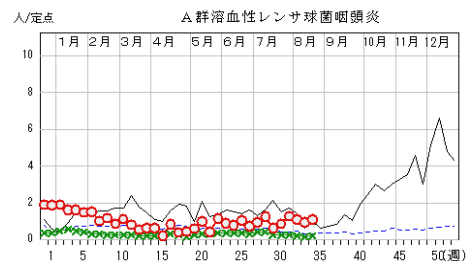
### （2）感染性胃腸炎

第34週の報告数は68人で、前週より14人多く、定点当たりの報告数は1.55であった。  
年齢別では、2歳（11人）、4歳（10人）、1歳（9人）の順に多かった。  
定点当たり報告数の多い保健所は、県央保健所（3.50）、佐世保市保健所（2.33）、県北保健所（2.33）であった。



### （3）A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第34週の報告数は48人で、前週より6人多く、定点当たりの報告数は1.09であった。  
年齢別では、3歳（10人）、1歳（8人）、4歳（4人）の順に多かった。  
定点当たり報告数の多い保健所は、県南保健所（9.00）であった。



○ 当年(長崎県)      — 前年(長崎県)  
× 当年(全国)      - - 前年(全国)

## ☆上位3疾患の概要

### 【手足口病】

第34週の報告数は88人で、前週より9人多く、定点当たりの報告数は2.00となりました。地区別にみると県北地区（7.67）、県央地区（5.17）は他の地区より多く、警報レベル開始基準値「5.0」を超えていますので注意が必要です。

手足口病は、例年5月頃から報告数が増加し、夏場にピークを迎えます。本疾患は、口腔粘膜および四肢末端に現れる水疱性発疹を特徴とする乳幼児に多いウイルス性疾患です。感染経路は、糞口感染が主体で、飛沫感染や水疱内容液からも感染します。急性期に最もウイルスの排泄量が多く、回復後も2週間から4週間程度は、便中にウイルスが排泄されるため感染源となりえますので、保護者は乳幼児に手洗い、うがいを励行させて、感染防止に努め体調管理に気をつけてあげましょう。原因ウイルスの種類によっては手足口病とともに無菌性髄膜炎や脳炎を併発させることもありますので、保護者は早目に医療機関を受診させてあげるよう心掛けましょう。

【感染性胃腸炎】

第34週の報告数は68人で、前週より14人多く、定点当たりの報告数は1.55でした。地区別にみると県央地区（3.50）、佐世保地区（2.33）、県北地区（2.33）の定点当たり報告数は他の地区より多くなっています。今後も予防に努めましょう。

本疾患は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。原因はノロウイルスをはじめとするカリシウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に乳幼児には、手洗いの励行とともに、体調管理に注意して感染防止に努め、早めに医療機関を受診させましょう。

【A群溶血性レンサ球菌咽頭炎】

第34週の報告数は48人で、前週より6人多く、定点当たりの報告数は1.09でした。地区別にみると県南地区（9.00）の定点当たり報告数は、警報レベル開始基準値「8.0」を超えていますので特に注意が必要です。

本疾患の好発年齢は5歳から15歳で、鼻汁、唾液中のA群溶血性レンサ球菌を含む飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1日から4日で、突然の発熱（高熱）、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により、多くは1日から2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早めに医療機関を受診するとともに、手洗いやうがいを励行し、感染防止に努めましょう。

☆トピックス：腸管出血性大腸菌感染症に注意しましょう

腸管出血性大腸菌感染症は、O157やO26をはじめとした「腸管出血性大腸菌」による感染症です。

主な感染経路は、菌に汚染された食品や患者の便で汚染されたものに触れた手を介した経口感染です。2日から9日の潜伏期間の後、腹痛・水様性下痢・血便などの症状を呈します。無症状の場合もありますが、発症者の約6%から7%が、溶血性尿毒症症候群（HUS）や脳症などの合併症を起し、時には死亡することもあります。特に、抵抗力が弱い小児や高齢者等は注意が必要です。

県内では、2022年第34週までに腸管出血性大腸菌感染症が32例報告されています。

例年夏期に発生が多い傾向にありますが、9月以降も患者の報告がありますので、次の点に気をつけて感染予防に努めましょう。また、症状があるときは速やかに医療機関を受診しましょう。

○外出から帰ってきたときやトイレ・オムツ交換の後、調理・食事の前には石鹸と流水で十分に手を洗いましょう

○肉類を調理する際は十分に加熱しましょう

○生肉を調理する際、器具は専用のものにするか、使用后すぐに十分な洗浄・消毒をしてから他の調理に使用しましょう

○下痢症状のあるときはプールの使用や入浴は控え、シャワー浴または最後に入浴しましょう

